

『源氏物語』にみられる書論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1433

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『源氏物語』にみられる書論

伊藤 博

はじめに

『源氏物語』にみられる書論とは、紫式部の書論と考えてよいかも知れない。なお、『源氏物語』において「書」についての言及の多くは、作中人物のことばによって行われている。その主なものは「梅枝」の巻の光源氏の、「帚木」の巻の左馬頭の発言である。勿論、いわゆる地の文においても作中人物の筆跡についても述べられている。いずれにしても『源氏物語』にみられる筆跡についての記述は、十世紀後半から十一世紀はじめにかけての、「書」のあり方についての批評、感想とみてよからう。と同時に、作中人物の特性の一端を言いあてているものと考えられる。

小論においては、「梅枝」の巻を中心にして、いくつかの筆跡についての記述をとりあげることによって、当時の「書」のありよう及び作中人物と「書」とのかかわりについて述べたい。

一 「帚木」の巻の論

左馬頭の女性論の中に、次のような一節がある。

『源氏物語』にみられる書論

手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしの、点長に走り書き、そこはかたなく気色ばめるは、うち見るにかどかどしく気色だちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、いま一たびとり並べて見れば、なほ実になむよりける。(帚木) △新編日本古典文学全集による▽

「かどかどしく気色だち」ているのよりも「まことの筋をこまやかに書き得たる」筆跡を評価し、「なほ実になむよりける」と結ぶ。ここは、本格的な女性論の前段階になされている絵画論などについて述べられている書論のためか、「点長に走り書き」とある以外には、具体的なことばはない。ここでは「気色ばめる」「気色だち」の語の使用が目立つ。技巧が直接表面にあらわれるよりも、「まことの筋」に「実」が見られると評価している。

この「実になむよりける」について、例えば「実直なほうに良さが認められます」(『全集』△並▽)と現代語訳されている。『集成』もほぼ同様に「実直な書き方のほうがすぐれています」とある。ただ、『新大系』では「真実に基づいた書き方ですよ」とある。「実」を「実直」「真実」と解釈するといくらかの差違が感じられる。『源氏物語』には「実」の用例がほかに六例ある。そのうちには「実の御子」(常夏)、「実の母君」(若菜上)や、「実を尋ね知らむ人」(東屋)、「実ならぬことをもくねり言ひ」(東屋)などの例がある。これらから、「実」は、真実、事実、まことといった意に解することができる。なお、二条院で匂宮と暮らす中の君を思う薫の心中を述べる一節に次の例がある。

例の、いかにぞやおぼゆる心のそひたるぞ、あやしきや、されど、実の御心ばへは、いとあはれにうしろやすくぞ、思ひきこえたまひける。(早蕨)

『全集』では、右の「実」について、「中の君への懸想心を抑制して後見に徹しようとする実直な心」と注する。

「帚木」の巻の「実」の訳語は、その文脈に沿うなら「実直」ということになろうか。しかし、書き手の真底からの心、まことの心を求めるといふ気持ちを表すためには、「真実」ということになろうか。この部分の「実」の訳出は微妙な問題を含んでいるが、要するに、左馬頭は「まことの筋をこまやかに書き得」るために、技巧もさることながら、やは

り「心ばへ」の「実」が根本にあることを求めている。さらに、左馬頭は女性論のまとめで、学才をひけらかす女性について語ったことばの中で次のようにも述べている。

わざと習ひまねばねど、すこしもかどあらむ人の耳にも目にもとまること、自然に多かるべし。さるままには真名を走り書きて、さるまじきどちの女文、なかば過ぎて書きすすめたる、あなうたて、この人のたをやかならましかばと見えたり。心地にはさしも思はざらめど、おのづからこはしき声に読みなされなどしつ、ことさらびたり。

(帚木)

こども書論というわけではないが、女性の手紙に、「真名を走り書きて」「なかば過ぎて書きすすめ」ることを批判している。「真名」を書くことによって、相手に「こはこはしき声に読みなされ」る結果まで考慮しなくてはならないという。書く行為が、読まれる折にどういう効果を及ぼすかという心くばりを求めている。

「帚木」の巻では、具体的な論というよりも、むしろ心のありようが説かれているとみてよい。

二 「梅枝」の巻の論

「梅枝」の巻では、光源氏のことばによって、当代女性の仮名批評がなされている。まず次のことばからはじまる。

よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。古き跡は、定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける。(梅枝)

光源氏は冒頭に、「万事、昔に比較して現代は劣りぎみであるが、仮名だけはすぐれている」と述べている。光源氏の尚古思想には、末法思想が絡んでいるという指摘(『全集』頭注)があるが、仮名に関しては当代の優位を説いている点に注目したい。つづけて、女性たちの筆跡についてかなり具体的に批評する。

中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行ばかり、わざとならぬを得て、際ことにおぼえしはや。

六条御息所の「心にも入れず走り書」きした一行を格別にすぐれていると言う。冒頭のことばにもあったが、六条御息所への批評語にも「際」という語が使用されている。「際」はその人の持っている才能の限界という点であろうか。「際なし」はその限界が果てしないという意。「際こと」は才能の格別、絶妙をいうのであろう。

更に秋好中宮については次のように語る。

宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらん。

また、藤壺の宮、隴月夜尚侍、朝顔の姫君、紫の上についても批評は及ぶ。

故入道の宮の御手は、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞ少なかりし。院の尚侍こそ今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。さはありとも、かの君と、前斎院と、ここにこそは書きたまはめ。△中略▽真字のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそまじるめれ。

(梅枝)

なお、最後の「真字の……」は、紫の上の筆跡についての批評とする考えもあるが、小論では一般論としておく。右に述べられている光源氏の批評語を抜き出して示す。

(1) 秋好中宮 「こまかにをかしげなれど、かどや後れたらん。」

(2) 藤壺の宮 「いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひ少なかりし。」

(3) 隴月夜尚侍 「今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。」

「かど」の訳語としては「才気」、「そぼる」は「しゃれる」でよいか。なお、「そぼる」の用例は『源氏物語』中三例あり、うち一例は、柏木の筆跡について述べられた批評のことばに「書きざま今めかしうそぼれたり」(胡蝶)と用いられている。隴月夜の批評とあわせて、現代風は「そぼる」なのであろうか。

藤壺に用いられている「けしき」「にほひ」の訳語はなかなかむずかしい。諸注には次のようにある。

「けしき」

○『全集』 見た目。(頭注)

○『新大系』 「気色深う」で、奥行きを感じさせ。(脚注)

「にほひ」

○『全集』 ただよはなやかな気品・余情をいう。(頭注)

○『集成』 はなやかさ。(傍注)

○『新大系』 潤い。(脚注)

「けしき」は、作品の内部にひそむものが、おのずと外面にあらわれることをいうのであろう。当然、「けしき」は視覚的把握からなされることばである。ここでの「にほひ」の用例も視覚的にとらえられる、花やいだ美しさをいうことばである。

最後の「真字の……」の解釈も諸注に微妙な差違がある。

○『全集』 漢字が上達するわりには、仮名に整わない文字がまじる。ここは、漢字・仮名の両方を用いる男への一般論である。なお、これを紫の上の筆跡への批評と解する一説もある。(頭注)

○『集成』 漢字に習熟すればするだけ、仮名は整わない字がまじるようですね。女の紫の上が漢字に上達することは考えられないから、ここは男の側からの感想。(頭注)

○『新大系』 (一般に) 漢字が上達するようには、仮名は上達しないようだ、の意か。(脚注)

右の注にもある通り、この一文は紫の上個人についての感想ではなく、一般論と考えてよからうか。現代語訳に少々問題も残るが、要するに、仮名のむずかしさを言った点が注目される。また、漢字と仮名とでは筆法にそれぞれの困難さがあるということでもあろうか。

なお、光源氏は女性批評の最後に、朧月夜尚侍、朝顔の姫君、紫の上を当代の仮名の名手と言う。紫の上は『物語』に登場した折、その筆跡について将来の上達が予見されていた。

うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおぼゆれば、心ながらあやしと思す。△中略▽（「かこつべき」の和歌）いと若けれど、生ひ先見えてふくよかに書いたまへり。（若紫）

右から二十年あまりの歳月が経過して、当代の仮名の名手と光源氏から評される。また、紫の上発見の北山の場面で、光源氏にとっては「限りなう心を尽くしきこゆる人」（若紫）であつた藤壺の宮。やがて時は流れ、今は亡きその人の筆跡を「にはひ少なかりし」と言う。この批評的言辞は、単なる書論にとどまらず、『物語』の展開の上でも見逃せない。女性批評から、さらに螢兵部卿宮の筆跡に話は進む。

やがて御覧ずれば、すぐれてしもあらぬ御手を、ただ片かどに、いといたう筆澄みたるけしきありて、書きなしたまへり。歌もことさらめき、側みたる古言どもを選りて、ただ三行ばかりに、文字少なに好ましくぞ書きたまへる。大臣御覧じ驚きぬ。（梅枝）

螢兵部卿宮の批評に関する主なことばを抜き出すと、「ただ片かど」「筆澄みたるけしき」「歌もことさらめき、側みたる古言」「三行ばかり」「文字少なに」とある。「片かど」には次のように注する。

『全集』 一つの長所というべく。（現代語訳）

『集成』 未熟ながら才氣に任せて。（傍注）

『新大系』 ちょっとした才覚を発揮して。（脚注）

「片かど」は『源氏物語』中六例ある。「梅枝」の巻にも、右の後文に光源氏の夕霧への訓戒のことばに見える。

親なくて世の中かたほにありとも、人柄心苦しうなどあらむ人をば、それを片かどに寄せても見たまへ。（梅枝）

右は「一つのとりえ」という意であらう。

「筆澄みたる」については、『孟津抄』の「筆のあかぬけたる也」による注が一般的である。なお、右の後文に左衛門督の筆跡を批評する文に次のようにある。

ことごとしうかしこげなる筋のみ好みて書きたれど、筆のおきて澄まぬ心地して、いたはり加へたるけしきなり。

(梅枝)

「文字少なに」には次のように注する。

『全集』 漢字を少なく。ほとんど全部仮名文字である。(頭注)

『集成』 仮名だけで書かず、漢字混じりにしたので、字数が少なくなっているであろう。(頭注)

『新大系』 (漢字を多用して) 字数少なめに。(脚注)

『全集』は『集成』『新大系』と異なり、『集成』と『新大系』も微妙に差違がある。この部分はかなり重要なのであるが、残念ながらいずれとも決めがたい。

螢兵部卿宮の筆は、格別すぐれているわけではないが、あかぬけのした筆致、気の利いた題材の選択、好ましい構成である。光源氏は「さらに筆投げ棄てつべしや」という。『全集』頭注にもあるように、これは「わざと大げさにほめてい」るのであろう。しかし、螢兵部卿宮の筆跡は、当代の一つの水準に達しているとみてよいか。

さらに、光源氏の書いた草子については次のように述べている。

唐の紙のいとすくみたるに、草書きたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、高麗の紙の、膚こまかに和うなつかしきが、色などははなやかならで、なまめきたるに、おほどかなる女手の、うるはしう心とどめて書きたまへる、たとふべき方なし。見たまふ人の涙さへ水莖に流れそふ心地して、飽く世あるまじきに、またこの紙屋の色紙の色あはひはなやかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる、見どころ限りなし。しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、さらに残りどもに目も見やりたまはず。(梅枝)

右では三種の料紙それぞれにふさわしい三種の筆法がなされている。抜き書きして次に示す。

(1) 唐の紙のいとすくみたる——草

(2) 高麗の紙の、膚こまかに和うなつかしき、色などははなやかならで——おほどかなる女手

(3) 紙屋の色紙の色あはひはなやかなるに——乱れたる草の歌

(1)の「すくむ」について、「縮かむこと。『細流抄』は、「こはこはしきなり」という。また「草」について、「万葉仮名の草体。料紙に合せて、男性風な趣」(『集成』頭注)と注する。(2)も同様に料紙に合わせた「おほどかなる女手」、(3)も料紙にふさわしい「乱れ書き」である。三通りの筆法がいずれも見事であることから、例によって光源氏の卓越さを語る。なお、その筆跡を「おほどか」と評された人物には、ほかに秋好中宮、落葉宮がいる。秋好中宮については後に少しく述べたい。

さらに、「もの好みする若き人々」には、「葦手、歌絵を思ひ思ひに書け」と光源氏が指示する。葦手の草子のうちで、宰相中将(夕霧)については次のように述べる。

水の勢ひゆたかに書きなし、そそけたる葦の生ひざまなど、難波の浦に通ひて、こなたかなたいきまじりて、いたう澄みたるところあり。またいといまめかしうひきかへて、文字様、石などのたたずまひ、好み書きたまへる枚もあめり。(梅枝)

右では葦手の書き方がかなり具体的に述べられている。また、ここでも「澄みたる」という批評用語が使用されている点に注目したい。なお、夕霧もその筆跡を「手はまだいと若けれど生ひ先見えていとをかしげに」(少女)と評された。この折、夕霧は十二歳。「梅枝」の巻では十八歳。「いといまめかしう」という批評語も、「もの好みする若き人々」ゆえであるうか。

『源氏物語』中、「葦手」の用例は右一例のみである。『源氏物語』以前には、『延喜二十一年京極御息所歌合』『天徳四

年三月三十日内裏歌合』にすでに見える。また『宇津保物語』にも、「葦開中」に二例、「国讓上」に二例ある。そのほか『拾遺和歌集』『券五・賀』一七三番歌の詞書にもある。『源氏物語』以後では『栄花物語』に五例ある。これらの用例に述べられている記述に比較して、「梅枝」の巻での表現はかなり具体的である。料紙の絵柄、葦手の筆法についての記述から、仮名と自然の景物とが共存する様子が想起されることから、きわめて興味深い例である。

やがて、螢兵部卿宮は邸にあるいくつかの手本を取り寄せる。「嵯峨帝の、古万葉集」「延喜帝の、古今和歌集」を見る光源氏は次のように賞美する。

尽きせぬものかな。このごろの人は、ただかたそばを気色ばむにこそありけれ。(梅枝)

「仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる」と言うことばではじまった光源氏の書論は、嵯峨帝、延喜帝時代讚美で終わるところが注目される。勿論、歌集も、本の仕立も、書き手もすべてが前時代の逸品ゆえ評価しているのであろうが、「巻ごと」に御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる」ところが眼目ではあるまいか。なお、『全集』には「ここでも理想的古代から現代を評する源氏の批評精神に注意される」(頭注)と述べられている。光源氏の尚古思想は確かにある。しかし、『源氏物語』時代の仮名の書風として、「乱れたる草」を自在に書く光源氏自身の姿から、当代の理想的書風のありようがうかがえる。

三 秋好中宮、末摘花、近江の君

『源氏物語』の女君で、その筆跡についての記述が比較的多くみられるのは、紫の上と末摘花であろうか。また、特異な性格ゆえか、近江の君についてもその筆跡について述べられている。ここでは末摘花と近江の君の筆跡について述べるが、その前に「いとおほどか」と評されている秋好中宮についてみてみたい。

鈍色の紙のいとかうばしう艶なるに、墨つきなど紛らはして、

消えがてにふるぞ悲しきかきくらしわが身それとも思ほえぬ世に

つつましげなる書きざま、いとおほどかに、御手すぐれてはあらねど、らうたげにあてはかなる筋に見ゆ。(霽標)

六条御息所の死を悼む光源氏の手紙への返事である。料紙は喪中にあるゆえ鈍色。「墨つきなど紛らはして」について、『集成』は「墨の濃淡など、美しく紛らわしてお書きになって。薄鼠色の紙に筆跡が見え隠れし、次の「消えがてに」の歌意にふさわしいものとなる」(頭注)と注記する。母を失った悲しみのさなかにあっても、細心の配慮ができるということ。なお、この姫君の書風は「おほどか」である点が特色であるうか。書風についてのことばではないが、後年、光源氏が秋好中宮の許を訪れた折、その印象を「例の、いと若うおほどかなる御けはひにて」(鈴虫)と述べられている。紫の上、秋好中宮と比較して、末摘花の筆跡は特異である。その叙述例を次に示す。

晴れぬ夜の月まつ里をおもひやれおなじ心にながめせずとも

口々に責められて、紫の紙の年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまつり。(末摘花)

「中さだ」については、『全集』で次のように注記する。

古代ほどでないが、少し古い時代。＼中略＼行成風以前の、まだ草仮名(平仮名と漢字の草体との中間の仮名の字体)の小野道風や藤原佐理などの書風と考えられる。(頭注)

末摘花の筆跡の古風さを「文字強う」と言う。和歌の書き方も「上下ひとしく」とあることによって時代遅れを強調する。さらに、次のようにもある。

陸奥国紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深う染めたまへり。いとよう書きおほせたり。(末摘花)

ここでは、具体的に書風については述べていない。懸想文の料紙としては不似合な「陸奥国紙の厚肥えたる」ことを述

べ、この姫君の性格を強調する。右のすぐ後文で、末摘花の和歌について、「筆のしりとする博士ぞなかべきと、言ふかひなく思す」という光源氏の心中が述べられている。当然、書風についても今様の書き方を教える人がいなかったのである。

御小桂の袂に、例の同じ筋の歌ありけり。

わが身こそうらみられけれ唐衣君がたもとなれずと思へば

御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫り深う、強う、固う書きたまへり。(行幸)

「末摘花」の巻からすでに十八年の歳月が流れている。しかし、変わらぬ末摘花の筆跡である。なお、「しじかみ」について、『全集』には「ちぢかんで、彫りつけたように、なめらかな連綿体ではない」と注記がある。

近江の君については次のように述べられている。

草わかみひたちの浦のいかか崎いかであひ見んだごの浦波

大川水の」と、青き色紙一重ねに、いと草がちに、怒れる手の、その筋とも見えず漂ひたる書きざまも、下長に、わりなくゆゑはめり。行のほど、端さまに筋かひて、倒れぬべく見ゆるを、うち笑みつつ見て、さすがにいと細く小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。(常夏)

末摘花が光源氏に和歌を贈るたびに「唐衣」を繰り返すのに類似する近江の君の一首である。近江の君の筆跡を表すことばは次の四点である。

(1)草がち

(2)怒れる手

(3)書きざまも、下長に

(4)行のほど、端さまに筋かひて、倒れぬべく見ゆるを

まず、「草がち」であることを難点としてあげる。例えば、明石の君の筆跡について次のようにある。

手習どもの乱れうちとけたるも、筋変り、ゆゑある書きざまなり。ことごとしう草がちなどにもざえかかず、めやすく書きすましたり。(初音)

「草がち」でも筆跡を「めやすく書きすましたり」と評している。「怒れる手」について、『全集』では「角ばった筆跡」、『集成』では「いかつい筆跡」と注する。「怒る」という語は『源氏物語』で他に四例ある。うち一例が、「帚木」の巻の左馬頭の絵画論で「荒海の怒れる魚のすがた」と用いられている。この「怒れる」について、『全集』では「恐ろしげな」と現代語訳している。「怒る」が、書、絵画の批評語として使用されている点は興味深い。「怒れる手」から具体的にその筆跡を説明することはむずかしいが、女性の筆としては異質ということを誇張して述べたものである。なお、「行のほど」「倒れぬべく見ゆる」書き方は、中古の書風として例がある。しかし「わりなくゆゑばめり」という点の問題なのであろう。近江の君の筆跡についての批評は、弘徽殿女御の「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」でしめくられる。

近江の君の筆跡についての言及も、末摘花同様に「書」そののみを問題にしているわけではない。紫の上、秋好中宮などと同様に、作中人物の特性を端的に表現する一つの材料として筆跡が問題にされている。

おわりに

「帚木」の巻では、左馬頭が「点長に走り書き、そこはかたなく気色ばめる」筆跡の才気よりも、「実」の大切さを説いている。

「梅枝」の巻に見られる書論の中、光源氏のことばには「尚古思想」がうかがえる。しかし、仮名に関してでは当代の優

位を説いている。六条御息所、藤壺の宮、隴月夜尚侍、朝顔の姫君、紫の上の仮名について言及している点に注目される。光源氏については地の文で、

(1)おほどかなる女手の、うるはしう心とどめて書きたまへる

(2)乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる

と述べられているところに、当代の理想的な書風の一端がうかがえようか。右によると、「心とどめて」と「筆にまかせて」が眼目なのであろう。「乱れ書き」のむずかしさは、「わりなくゆゑばめり」(常夏・近江の君)という結果におちいるからか。「筆にまかせ」ての技巧であるために、その自在さがどれだけ線條の美しさになり得るかということでもあろう。技巧と心のありようという問題は、くりかえし述べられている。また、光源氏の筆跡を「おほどか」と評している点も注目される。人間が「おほどか」であることのむずかしさ。「おほどか」であることは、勿論熟練だけでは達成できない。品性、その人物をとりまくさまざまな生活のあり方によるものなのか。それはともかくとして、「おほどかなる」筆の達人が、「乱れたる草」も可能であるということ。「乱れ」と「おほどか」とは、本質的には同時に相容れないものではないか。光源氏だけが、両者を同一場面で書き得るのであろう。なお、「葵」の巻で、光源氏の筆跡賛美の一節がある。葵の上の死後、光源氏は左大臣家を去る。左大臣は、源氏と葵の上が用いた御帳台の傍らに置かれた手習を目にする。

あはれなる古言ども、唐のも大和のも書きけがしつづ、草にも真字にも、さまざまめづらしきさまに書きまぜたまへり。「かしこの御手や」と空を仰ぎてながめたまふ。(葵)

光源氏二十二歳の折である。ここでも「草にも真字にも」、左大臣をして「かしこの御手や」と賛嘆させる。

先述の「梅枝」巻にある「真字のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそまじるめれ」を再度引くが、この一節について、吉澤義則氏は「これは漢字と仮名との書法精神の相違に伴ふ事実である」(対校源氏物語新釈巻三)と注する。「書」においても、光源氏の超越性が語られているという指摘とともに、漢字の「書」を受容し、やがて仮名の「書」を

創造、完成してゆく平安朝の「書」のありようの一端がうかがえることも付記しておきたい。

また、筆跡と料紙とのかかわりが重視されていることはいうまでもない。末摘花、近江の君は、和歌も料紙も笑いを誘う。この二人は、「梅枝」の巻で、光源氏から評価された女君たちとは対極にある。もっとも書論の上では、末摘花と近江の君が存在することによって、批評語の多様さという効果をもたらしている。

『源氏物語』での「書」についての言及は、先行作品、また後の『栄花物語』などと比較してきわめて豊富である。そこに使用されている批評用語のあるものは、現代語訳をするのにやや困難な例もあるが、優劣に関する具体的な記述から、当時の評価基準が適確に理解できる。美意識の問題は、時間と空間の相違によって必ずしも一定ではない。しかし、『源氏物語』にみられる書論では、「心」のありようを論の核にすえていることは注目される。

(注) 小論では、『新編日本古典文学全集』を『全集』、『新潮日本古典集成』を『集成』、『新日本古典文学大系』を『新大系』と略する。